The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	徳島市における3拍動詞アクセントの変化について : 1段活用動詞と5段活用動詞の変化の速度差
Author(s)	村田, 真実
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2018, 2017, p. 73-79
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69994
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

徳島市における３拍動詞アクセントの変化について

―1 段活用動詞と 5 段活用動詞の変化の速度差―

村田 真実

要旨　徳島市における 3 拍動詞アクセントの変化について整理した。整理するにあたり、森(1989)、上野・仙波(1993)、岸江・仙波・岡田・村田(2010)にあるデータを用いた。結果として、1919 年ごろから 1989 年ごろに生まれた話者の、見かけの時間上のアクセントの変化を示すことが出来た。第 2 類 1 段活用動詞の HLL から LLH への変化の過渡期は 1920 年から 1950 年ごろに生まれた話者が担っており、1960 年前後に生まれた話者に至って定着したと考えられる。また、5 段活用動詞の HLL から HHH（あるいは LLH／HHF）への変化の過渡期は 1945 年から 1961 年ごろに生まれた話者が担っており、1962 年以降に生まれた話者に至って定着した様子が分かった。また、これらの変化は内的変化に起因しているものの、変化の速度については、定期航路によって徳島と本州が接続したことによる外的影響を受けた可能性を示唆した。

1 本稿の目的

徳島市のアクセントは、近畿中央部のアクセントと似た体系、音調を持つ。ここで、似た体系としたのは、一部に『補忘記』の時代（中近世）の京都アクセントの体系を残しているからである[1]。しかし、岸江・村田 (2012)でも述べた通り、現在の徳島市のアクセントは若年層を中心に変化しつつある。岸江・村田 (2012)では近畿中央部および周辺部の 2 拍名詞のアクセントの変化について述べたが、先行研究を見ると、名詞に限らず、動詞、形容詞等でも変化が起こっていることが推測出来る。

本稿では、徳島市における 3 拍動詞アクセントに焦点を絞り、3 つの重要な先行研究をもとに、1919 年ごろから 1989 年ごろに生まれた話者の、見かけの時間上のアクセントの変化を整理する。その上で、動詞アクセントの変化の方向と要因について検討する。

ここでは、H を高拍、L を低拍、F を下降拍と表記する。先行研究の表記もすべて H/L/F に置き換える。

2 先行研究

2.1 森論文

本稿では、森(1989)を森論文と呼ぶ。森論文の方言区画では、徳島市は「下郡（しもご

1　金田一 (1974)の付図より。

おり：平野部の特に北東の方を指す方言区画)」に属し、平山(1957)の用語を用いて京阪 I 型としている。即ち、2 拍名詞について、統合数は 4、第 2 類と第 3 類のみが統合しているという体系を持つということである。森論文には 2 度にわたる全県アクセント調査の結果がまとめられており、1 度目が 1957 年時の調査結果、2 度目が 32 年後の 1989 年時の調査結果である。1957 年時の調査は、当時の中学 3 年生、つまり 1942 年生まれの話者たちを調査したものである。1989 年時の調査は、当時の若年層（11 歳～25 歳、1964 年～1978 年生まれ)、中年層（45 歳～64 歳、1944 年～1963 年生まれ)、高年層（65 歳以上、1924 年以上）の 3 世代の調査結果がまとめられている。3 拍動詞について特筆すべきことは、若年層において、どの類でも LLH の出現が増えつつあるということである。森論文の調査結果をまとめると、表 1 のようになる。3 拍動詞について、類の別なく LLH 型に向かって収束しつつあることが読み取れる。第 2 類に注目すると、1 段活用動詞の過渡期は 1924 年から 1963 年生まれの話者の間で、1964 年以降に生まれた話者からは安定して LLH が出現するようになっている。5 段活用動詞の方は、過渡期は 1964 年から 1978 年に生まれの話者の間で、安定して LLH が出現するに至っていない。

2.2 上野論文

本稿では、上野・仙波(1993)を上野論文と呼ぶ。上野論文は、1991 年から 1992 年にかけて、年代・男女の別を設けて各年代 10 名以上調査し、計 122 名の話者からデータをとったものである。調査対象となったのは第 2 類の動詞で、第 2 類の変化がどこで起こったかを調べることが目的であった。上野論文の結果から、各世代の優勢な型[2]をとりだすと、表 2 のようになる。

調査の結果から、上野論文は「1 段活用の変化の方が 5 段活用のそれよりも数十年早く進行している」ことを示した。また、1 段活用動詞の過渡期は 1921 年から 1960 年生まれの話者の間で、1961 年以降に生まれた話者からは安定して LLH が出現するようになっている。5 段活用動詞の方は、過渡期は 1950 年から 1961 年生まれの話者の間で、1962 年以降に生まれた話者からは安定して LLH が出現するようになっている。

2　本稿では 30%以上の使用頻度があった型を優勢なものと判断した。占める割合がより高いものを上に書いた。

表１　森論文の調査結果

調査の区別	1989 年時調査	1989 年時調査	1957 年時調査	1989 年時調査
話者の生年	1964 年～1978 年	1944 年～1963 年	1942 年	1924 年以前
第 1 類 5 段活用 1 段活用	LLH／HHF	HHF	HHF	HHF
第 2 類 5 段活用	LLH／HHF[3]	HLL	HLL	HLL
第 2 類 1 段活用	LLH[2]	LLH／HLL	LLH／HLL	LLH／HLL
第 3 類	LLH	LLH	LLH	LLH

表２　上野・仙波論文の調査結果

話者の生年	1981 年～（10 代）	1971 年～（20 代）	1961 年～（30 代）	1951 年～（40 代）	1941 年～（50 代）	1931 年～（60 代）	1921 年～（70 代）
第 2 類 5 段活用	HHH	HHH	HHH HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
第 2 類 1 段活用	LLH	LLH	LLH	LLH HLL	LLH HLL	HLL LLH	HLL LLH

2.3 岸江資料

本稿では、岸江・仙波・岡田・村田(2010)を岸江資料と呼ぶ。岸江資料のデータは、平成 10 年から平成 16 年にわたって本調査が行われ、平成 21 年の追加調査を以って完結した。調査の目的は、吉野川流域 22 地点において、京阪式アクセントと讃岐式アクセントの分布を年代ごとに明らかにすることであった。2009 年時点での話者の年齢で、20 代から 90 代まで、各地点 5 名以上を目安に計 99 名の話者に対して調査が行われた。岸江資料の徳島市の部分だけ取り上げると、表 3 のようになる。

第 2 類 1 段活用動詞の過渡期は 1920 年から 1949 年生まれの話者の間で、1955 年以降に生まれた話者からは安定して LLH が出現するようになっている。5 段活用動詞の方は、過渡期は 1945 年から 1955 年生まれの話者の間と推測され、1959 年以降に生まれた話者からは安定して HHH が出現するようになっている。

3　11 ページ b および、12 ページ a に「県東部、および県南部の若年層は、従来の頭高型アクセントにも違和感がないという共通の感想を持っている」という記述がある。

表 3　岸江資料の調査結果

話者の生年	1980～1989 年 (20 代)	1970～1979 年 (30 代)	1960～1969 年 (40 代)	1950～1959 年 (50 代)	1940～1949 年 (60 代)	1930～1939 年 (70 代)	1920～1929 年 (80 代)	1910～1919 年 (90 代)
第 1 類	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
第 2 類 5 段	HHH	HHH	HHH	HHH	HLL	HLL	HLL	HLL
第 2 類 1 段	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH HLL	LLH	HLL LLH	HLL
第 3 類	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH

3 変化の過程と要因

3.1 各論文・資料から見える変化の過程

森論文、上野論文、岸江資料にあるデータを整理し、1919 年ごろから 1989 年ごろに生まれた話者の、見かけの時間上のアクセントの変化を示した。動詞アクセントの変化の方向として、類の統合が進んでいることと、音調型が LLH に向かって定着していることが分かった。森論文では、第 1 類も LLH へ合流しているように見えたが、続く岸江資料からは定着しなかったことが伺えた。各論文・資料から分かる第 2 類の変化は表 4 のとおりである。1 段活用動詞の HLL から LLH への変化の過渡期は 1920 年から 1950 年ごろに生まれた話者が担っており、1960 年前後に生まれた話者に至って定着したと考えられる。また、5 段活用動詞の HLL から HHH（森論文では LLH／HHF）への変化は、各論文・資料でばらつきがあるものの、過渡期は 1945 年から 1961 年ごろに生まれた話者が担っており、1962 年以降に生まれた話者に至って定着したといえるのではないだろうか。上野論文も指摘していたが、1 段活用動詞と 5 段活用動詞の間には変化の進行に差があった。特に、変化が起こり始めた時期に大きな開きがあることと、ユレが収束して安定し、定着する時期はほぼ同じであることが各論文・資料から明らかになった。このことから、HLL から HHH に変化するより、HLL から LLH に変化する方が、安定するまでに時間がかかることが見て取れた。後者の方が前者より経済性が高そうに思うが、速度としては逆の結果が出た。

表４　各論文・資料から見る第２類の過渡期と安定期

第２類	時期	森論文(1989)	上野・仙波論文(1993)	岸江資料(2009)
1 段活用	過渡期	1924 年から 1963 年生まれの話者の間	1921 年から 1960 年生まれの話者の間	1920 年から 1949 年生まれの話者の間
	定着期	1964 年以降に生まれた話者	1961 年以降に生まれた話者	1955 年以降に生まれた話者
5 段活用	過渡期	1964 年から 1978 年に生まれの話者の間	1950 年から 1961 年生まれの話者の間	1945 年から 1955 年生まれの話者の間
	定着期	―	1962 年以降に生まれた話者	1959 年以降に生まれた話者

3.2 変化の要因の検討

変化の要因として、内的要因と外的要因の二つが考えられる。HLL から LLH への変化は、変化が終わるまでに時間がかかったこと、高拍を遅らせることに経済性が見えることから、内的な要因が働いて起きた変化であると考えられる。また、HLL から HHH への変化については、過渡期の短さから、周辺地域からの影響を受けた可能性があると推測出来る。本州四国連絡橋として、明石・鳴門ルートの要所である大鳴門橋が開通したのが 1985 年、明石海峡大橋を含む神戸・鳴門ルートが開通し、本州まで陸続きになったのが 1998 年のことである。それ以前は海路を以って人の行き来が行われていた[4]。1956 年に南海汽船により、徳島と和歌山の間に定期航路が出来た。その後、徳島高速船株式会社により、1978 年に徳島と大阪の間にも定期航路が出来た。5 段活用動詞の過渡期にあたる 1945 年から 1961 年ごろに生まれた話者たちの言語形成期[5]は 1952 年から 1976 年と考えられるので、船便で本州と繋がったことが 5 段活用動詞の変化を速めた可能性がある。

近畿地方の諸方言動詞アクセントは徳島市方言より先に変化している。京都市方言アクセントについては中井(2002)が詳しい。他に、中井(1997)、中井(2001)がある。大阪市方言アクセントは、名詞アクセントについて記述されたものは多くあるが、動詞アクセントを調べた基礎資料は少なく、世代差を明らかにした郡・杉藤 (1989)、史的変遷を明らかにした中井(2000)、中近世より続く史的観点から大阪およびその周辺部の状況を明らかにした加藤・中井(2009)・加藤(2012)、大阪府方言のアクセントの概要を記した郡(1997)、低接式アクセントの音声的特徴を明らかにした郡(2012)などが挙げられる。これらと比較してみると、周辺地域からの外的影響が徳島市における第 2 類 5 段動詞アクセントに変化の契機を与えたものと考えられる。1 段活用動詞は内的変化を加速させる外的影響を受けなかったので、変化が安定するまでに時間を要したのだろう。

4　明治期より定期的に商船が出ていた記録があるが、商船の特徴上、商業に関係しない人たちの人的交流が大きく促進されたとは判断出来ないと考える。
5　ここでは、言語形成期は 7 歳から 15 歳までとする。

4 徳島方言の動詞アクセントのこれから

各論文・資料において最も新しい世代は、1989年ごろに生まれの話者たちであるが、時は過ぎ、言語形成期を終えた新しい話者が誕生している。追加調査を行うことで、変化の先を知る必要がある。また、本稿では扱えなかったが、徳島県方言アクセントの研究は大正まで遡ることが出来、金沢治（かなざわおさめ）氏の『阿波言葉のアクセント』（昭和9年刊行）があれば、更に古い徳島市アクセントを踏まえて変化の位置づけを行うことが出来るであろう。上野論文にもある通り、現代諸方言の変化の過程を辿ることは、近畿中央部のアクセント史に説明を加えられる可能性がある。更に古い資料、そして更に新しい話者を調べる必要がある。

加えて、徳島県下の動詞アクセントの体系と分布、そして変化と成立過程を明らかにするためには、徳島市のような里分（さとぶん：平野部のこと）のみならず、広く山間部のアクセントを調べる必要がある。動詞アクセントの先行研究として、上野(1994)では木頭村（きとうそん）の動詞アクセントの類推変化について述べられており、上野(2000)では県下の讃岐式アクセント分布地域の動詞アクセントの成立について論じられている。また、上野(1992)、大和(1996)は出合アクセントについて述べている。これら山間部の特別な体系を持つアクセントに加え、宝田町方言（たからだちょう、これは里分になる）の音声的実現規則について明らかにすることで、宝田町方言が音韻レベルで京阪式アクセントの一種であることを説明した大和(1993)では、従来の報告で龍神型とされていたものと異なることが指摘されており、徳島方言においては本州における近畿周辺部（和歌山、三重など）に残存するアクセント変化の痕跡とまた違ったものが見られることが示唆されている。これらの成果を総合して、徳島県下の動詞アクセントの変化についてまとめる必要があるだろう。

引用文献

上野和昭・森重幸(1992)「徳島県出合アクセントについて」『徳島大学総合科学部紀要』5, 徳島大学

上野和昭・仙波光明(1993)「徳島市における三拍動詞アクセントの変化の実態」『徳島大学国語国文學』6, 29-37, 徳島大学.

上野和昭(1994)「徳島県木頭村の方言アクセントについて」『言語文化研究』1, 徳島大学

上野和昭(2000)「徳島県下の讃岐式アクセントにおける動詞アクセント体系について」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』45(3), 3-5, 早稲田大学

加藤望・中井幸比古(2009)「高知市方言・徳島市南部方言における動詞活用形のアクセント資料」『方言・音声研究』3, 方言・音声研究会

加藤望(2012)「京阪式アクセントにおける否定諸形の音調比較」『方言・音声研究』6, 方言・音声研究会

金田一春彦(1974)『国語アクセントの史的研究—原理と方法—』, 塙書房.
岸江信介・仙波光明・岡田祐子・村田真実(2010)『徳島県吉野川流域アクセントの動態—吉野川流域南岸グロットグラム調査報告(2)—』, 徳島大学国語学研究室.
岸江信介・村田真実(2012)「京阪式アクセントにおける 2 拍名詞の類の統合状況と低起無核型の消失傾向—大阪・奈良・三重・徳島方言を中心に—」『音声研究』16(3), 34-46, 日本音声学会.
郡史郎・杉藤美代子(1989)「大阪アクセントの世代差」『音声言語』3, 近畿音声言語研究会.
郡史郎(1997)『日本のことばシリーズ 27　大阪府のことば』, 明治書院.
郡史郎(2012)「現代大阪市方言における低起式アクセントの特徴(<特集>京阪式アクセントと京阪系アクセント)」『音声研究』16(3), 59-78, 日本音声学会.
中井幸比古(1997)『日本のことばシリーズ 26　京都府のことば』, 明治書院.
中井幸比古(2000)『大阪アクセントの史的変遷』, 科学研究費研究成果報告書.
中井幸比古(2001)『京都市方言アクセント小辞典—方言アクセント小辞典(5)—』, 科学研究費研究成果報告書.
中井幸比古(2002)『京阪系アクセント辞典』, 勉誠出版.
平山輝男(1957)『日本語音調の研究』, 明治書院.
森重幸(1989)『徳島県の方言アクセント概観—32 年後の動向—』, 私家版.
大和シゲミ(1993)「低起式語の音声的変種—徳島県阿南市宝田町の場合—」『待兼山論叢』27, 大阪大学
大和シゲミ(1996)「徳島県出合地方無核型アクセントの 2 種類」, 近畿音声言語研究会主催第 35 回音声言語研究会発表資料.